

第 62 卷 第10号

論 文

- 信濃国小県郡地方における古代白山  
 信仰の伝播……………倉澤 正幸… 1
- 考古学による弥生中期年代観の再考…松澤 芳宏…13  
 — 細形銅矛M1a・M1b式など、青銅器の再検討を中心に —

史料紹介

- 藤本善右衛門家史料と養蚕技術書  
 『蚕かひの学』……………小野 和英…41

信濃史学会第94回セミナー講演

- 肥前と信濃……………青木 歳幸…67  
 — 蘭学における交流を中心に —

受贈図書紹介 ……………81

秋季例会開催のお知らせ……………(表紙裏)

博物館情報 (84 . 85) / 雑誌関係要目 / 会員消息 /  
 会務報告 / 会誌『信濃』投稿規程

昭和三十四年一月二十九日第三種郵便物認可  
 平成三十二年一月二〇日発行(毎月一回)日発行  
 昭和七年一月第一次「信濃」創刊以来総巻第八六五号  
 通巻第七二九号

信 濃 史 学 会

論文

考古学による弥生中期年代観の再考

— 細形銅矛 M I a・M I b 式など、青銅器の再検討を中心に —

松 澤 芳 宏

一 はじめに

近時、弥生時代の実年代が放射性炭素(C<sup>14</sup>)や年輪年代法により、従来よりも古い年代観が示されていることは、周知の事実である。これは考古学による年代観と大きな矛盾が出ており、考古学方法論が大きな岐路を迎えているかのように見える。

しかし、はるか遡る先史時代の科学的年代観については、当時の年代に時間をもどすことは出来ないものであるから、確かめる術がない。

但し、弥生時代については『漢書』『後漢書』『三国志』など中国史(中国外郭圏の歴史記述を含む)により、年代比定が可能であり、中国史自体、考古学資料(たとえば銅鏡銘文・漆器銘文・錢貨などの鑄造時期)などと、あまり矛盾が

ないのであるから、中国史を定点とした先学の方法論は間違っていない。

中国古史を否定してまでも科学測定を信じることはあり得ないのであり、実年代科学測定の検証こそが、中国史を定点とした考古学の果たす役割であろう。

これに関連して杉原莊介氏は次のように述べている。「縄文時代については年代決定の方法が、現在はこれにたよるほかはない(C<sup>14</sup>測定)。しかし、弥生時代については大陸の文物との交流が行われ、これがために対比年代決定法が適用されて、かなりの効果をあげている。現在ではその年代に五〇年の差、少なくとも一〇〇年の差はあり得ないところまで来ている。もし、この二つの年代決定方法による結果に矛盾があるならば、それは後者に信用をおくことにならう。」<sup>[1]</sup>

意を付けていただいてもよい。

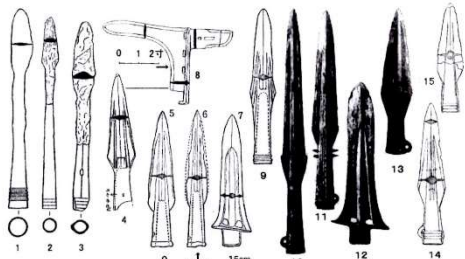
細形銅矛の分類は日本では、節帯(尖帯)二冬以上をI式、一条をII式とする意見がある。いっぽう、丈が短小のものをI式、細長いものをII式とする意見がある。

私は後者の分類を用いる。但し、I式II式の長さは漠然としているが、それは際どいところで、分類に困る。私は三五<sup>14</sup>前後までの丈短小形でやや幅広のものを細形銅矛I式、三五前後<sup>15</sup>前後までの細身のものをII式としておく。

長さが四五<sup>14</sup>以上のもは切<sup>15</sup>先方向が膨らむ傾向があり中細形とそれ以降の分類に任せたい。ただし、四五<sup>14</sup>未満でも切<sup>15</sup>先が膨らむ気配があれば、中細形とそれ以降に含める。分類に困れば、過渡的様相と表現すればよい。

細形銅矛I式は袋部外側面に、尖帯が一条、二条以上(多条)のものとあり、M I a式・M I b式と分類する(第14図参照)。

なお、沿海州南部のイスウェストフ丘遺跡例を、細形銅矛の最古式とみる分類の仕方もあるが、私は銅矛の袋部の尖帯がないので、粗形細



第14図 鉄矛・銅矛・銅支各種概念図(縮尺不同)

1・2・3 中国前漢代の鉄矛(袋部銅製)、他4~15青銅器。4・8は伝平塚付近出土の一括文物とされ、9は平塚市白根1号塚出土で前1世紀。5・6・13は細形銅矛M I a式、9・11・14・15は細形銅矛M I b式。11は朝鮮半島。14・15は福岡市板付遺跡出土。10は福岡市吉武高木3号木棺墓出土。10~12は福岡市板付遺跡出土。13は福岡市吉武高木3号木棺墓出土。14・15は福岡市板付遺跡出土。10は福岡市吉武高木3号木棺墓出土。10~12は福岡市板付遺跡出土。13は福岡市吉武高木3号木棺墓出土。14・15は福岡市板付遺跡出土。

付鉄矛(袋部銅製)や春秋戦国期以来の二条尖帯銅矛の影嚮を受け、北朝鮮白河洞一号墓(前二世紀)や韓国入室里遺跡などの例から、中国本土よりや遅れて銅矛に多条尖帯が加わったものである。日本でも弥生前期末~中期初頭前後から中期前半にみられるものであるが、半島より若干、実年代が下がるものもあると推定している。

M I b式は朝鮮半島の弥生年代は、細形銅矛第二段階の古期には流行しないので、前二世紀新期~前二世紀半ばまでの比較的短期間に流行したものと考えられよう。

なお、M I b式がM I a式に先行する日本では考えられていない人もいたようだが、朝鮮半島では大略、M I a式が先行し、のち、両者併行時期関係となるようだ。つまり、併行関係時に日本に細形銅矛I式が波及したのである。

福岡県板付遺跡(福岡市)地区遺跡群は弥生前期末前後とある。この細形銅矛M I b式細形銅矛が出土している。これは日本に青銅文化が最初に認められる最初の時期であるが、朝鮮半島細形銅矛の第二段階でも後半の時期の文化に相当しよう。

さて、袋部端部が欠けている細形銅矛類似様式の第14図4の伝平塚付近出土銅矛が、漢代以前の様式の紀年名があることか、場合によりM I a式か前二世紀新期に作成開始

も考えられる。秦始皇帝東御土の戦国期様式銅矛は一条尖帯があり、尖帯多型であるM I a式銅矛は中国戦国末期様式銅矛の影響が強いものである。

中国の戦国末期様式のT字型銅支(第10図)は、秦始皇二十五年在銘銅支(前二二三年)と同型式であり、それが同図4銅矛と伴出関係がある以上、それ以降紀元前二世紀にも確実にM I a式の流行年代が考えられよう。

M I b式は朝鮮半島の弥生年代は、細形銅矛第二段階の古期には流行しないので、前二世紀新期~前二世紀半ばまでの比較的短期間に流行したものと考えられよう。

なお、M I b式がM I a式に先行する日本では考えられていない人もいたようだが、朝鮮半島では大略、M I a式が先行し、のち、両者併行時期関係となるようだ。つまり、併行関係時に日本に細形銅矛I式が波及したのである。

福岡県板付遺跡(福岡市)地区遺跡群は弥生前期末前後とある。この細形銅矛M I b式細形銅矛が出土している。これは日本に青銅文化が最初に認められる最初の時期であるが、朝鮮半島細形銅矛の第二段階でも後半の時期の文化に相当しよう。

さて、袋部端部が欠けている細形銅矛類似様式の第14図4の伝平塚付近出土銅矛が、漢代以前の様式の紀年名があることか、場合によりM I a式か前二世紀新期に作成開始

近年の弥生時代実年代研究に先学の年代観が危機に瀕している実情において、改めて氏の提言こそ、我々が肝に銘じておきたいべきであらう。

放射性炭素測定や年輪測定年代の問題点については新井宏氏、その他幾多の研究の論文に詳しく、筆者の立ち入り問題ではないので、ここではふれない。

最近の科学測定により、弥生時代中期の始まりが、紀元前二世紀後半と見えて、四世紀最古期とすることや、科学測定にたよらずに、前二〇〇〇年前後からとする説が、今、学界では大勢を占めている。

これは、前二〇〇〇年前後から弥生中期が始まるという従来の説を覆すものである。

かつての説は中国史とその文物に著された考古学的考証によって組み立てられたものであり、果たして、それを覆すほどの科学・考古学・文献史的考察が可能であるのか、疑り深い私にとって、はなはだ疑問である。

ちなみに、最近の著書古墳に絡む放射性炭素C-14測定年代が、今度日本の弥生時代等を参考にしたと聞いている。

これは、弥生時代C-14標準(国立歴史民俗博物館 測定が世界的な弥生時代の較正曲線を加味したものであること)に、極めて矛盾していることである。古墳時代年代測定が

地球同緯度の日本の年輪年代を参考にしているならば、弥生時代C-14測定も日本の年輪年代をも加味した較正年代が求められるのではないだろうか。

私は科学については知識がないが、科学測定自体が正しいかどうか、判断できるのが従来からの弥生時代中期の考古学的考証に信じている。

考古学的方法の弥生中期の実年代観については、青銅器埋納坑の出現で有名な中野市柳沢遺跡の理解に欠くことのできない問題であるので、あえて数十年前の先学の定説に準じる考えを述べたことがある。

それは、弥生中期を前二〇〇〇年前後(二三〇年)と紀元後一世紀末前後(三三〇年)としたものである。

瀬戸内・畿内の弥生中期末期上層では九州よりも年代が若干下がるの意見もある。一世紀末は瀬戸内・畿内の年代観を取り入れた年代に從った。今までの弥生年代観私説と今回の論文は基本的に変わりがなく、細形銅矛の分類再考、鋳造鉄矛の位置付けなど、さらに補強すべき考古学的事象があるので、本稿に詳述する次第である。

二 銅矛より見た弥生中期実年代

今回、朝鮮半島と日本を通じて細形銅矛I a式・I b式を設定したい。他の人の分類と混同するため、M 松澤の

位置づけたい。

細形銅矛の末期形式として考え、M I a式成立の前段階に位置づけたい。

細形銅矛M I a式は短小(短尖帯)節帯(一条型細形銅矛)であり、袋部外側面に一条の尖帯を有するものを当てる。

M I a式細形銅矛を抽出する朝鮮半島の古い時期の遺跡については、前二世紀古期前後~新期の範囲内の韓国扶余郡九鳳里・咸徳草浦里・長水郡南陽里・北朝鮮咸興市梨花洞などの各遺跡がある。この年代観は王建新氏に準じた考えである。

ちなみに、王建新氏は朝鮮半島の細形銅矛文化第二段階とされるこれらの遺跡について、要約すると次のように考えている。

「撫順市(遼寧省)連珠堡遺跡は明刀銭や半兩銭の伴出で、前二世紀中期~前二世紀後半と推定しているが、鉄矛その他文物の類似から、共通点の多い細形銅矛第二段階の遺跡は、地域間の距離によって、発生した伝播過程や時間差を考慮すれば、上限は前二世紀最古期である。下限は漢武帝時代から流行の五銖銭・日貨鏡・星雲鏡などの中国中原系青銅器はまだ見られないので、前二世紀最古期以後を下らない。」

なお、細形銅矛文化第二段階とは、韓国錦江流域を中心

に細形銅矛・多鈕鏡・円盤形銅器・黒陶長頸壺・粘土土器(赤石里式・三角形磨製石鏡・勾玉・管玉・石佛鼻などの文化要素をなすものである。前四世紀かそれ以前の松原里式土器の年代を過ぎた時代であるので、おおよそ前二世紀ごろとする年代観に賛成したい。

第二段階はそれらの要素を引き継ぎ、新たに細形銅矛・銅支・双頭斧・組む合わす式双頭斧・有肩長方形銅斧・八頭鏟・ガラス管玉などの新しい文化要素が加わる。

つまり、慎重に年代幅をひろげても、細形銅矛文化第二段階は前二世紀前後の時期に該当すると理解したい。

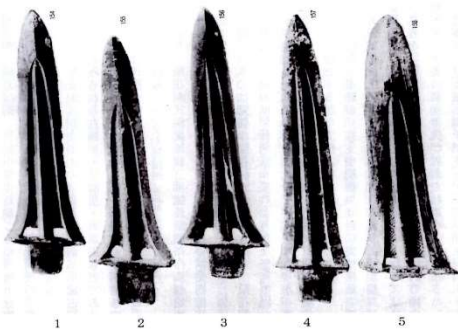
とりわけ、梨花洞土城墓の年代は細形銅矛第二段階文化遺跡中、多鈕鏡型式をも勘案して、新しい様相であるので、前二世紀中葉~新期と考えたい。

ただし、随結合式細形銅支類の、梨花洞式銅支(第14図)は内(八)巻ががっしりしたタイプで、日本にはあまり見られないもので、梨花洞土城墓の時期は日本の弥生前期後半並行に相当する。

一方で、細形銅矛M I b式は短小(短尖帯)多条型細形銅矛であり、袋部に二条とそれ以上の尖帯を有するものを分類した。

おそらく、前漢代各期を通じて、一部に存在する多条尖帯





第5図 朝鮮半島の銅戈  
1は伝説栗那部南面、2・3は咸州郡南面、4は伝説清南道、5は伝説北道の各地出土。1は梨花洞式、2・3は自柏里式だが、前者には梨花洞式銅戈の研ぎが進んだ段階もあるとされる。5は楯結合式複合原南支銅戈。2・3は現在の北朝鮮咸州市付近にあり、韓国4・5と比べると胡が発達している地域がある。出典『朝鮮古文化論叢1』養徳社1947。

支の内よりも、はるかに比率が小さいことが分かる。また、楯に文様があることも後出的要素とされる。

また、自柏里式が遼西式の楯分離式であることから、梨花洞式にやや先行する要素がある時期があり、両形式の盛行年代が前二世紀前後とする意見に賛同したい。

なぜならば、北朝鮮咸州市の梨花洞式銅戈を出した梨花洞土城塚出土の鉄斧が、北朝鮮龍淵洞積石塚古墳(明月鏡出土)より戦国後期のもの(前二世紀とされている)の鋳造鉄斧と同時か、やや新しい型式であり、土城塚では三趾細文鏡などを伴っているからである。また梨花洞遺跡では多趾粗文鏡は伴っていない。

梨花洞の三趾粗文鏡は王建新氏分節の多趾鏡のうち、B(多趾粗文鏡) II式で、細線の線は細かく立体感が無く、鏡は短小、細腰平帯状である。九鳳里のB I式の文細細腰平帯状鏡の存在や、文様の立体感がある型式とは異なっている。日本の多趾粗文鏡はすべてB II式とされる。

雲南省の長胡戈(第4図)については、それこそ私の言う版遼西式直後型式に類似性が深いものであるが、断定できず、中国東北地方以外での胡発達型銅戈の好例といえよう。

中国東北地方では春秋末期より戦国時代に深溝式銅戈が発生し、中国南部地方では浅溝式か無溝式銅戈が前漢代でも伝来であるようだ。

朝鮮半島や日本では燕の領域から伝わった深溝式銅戈の影響が強いと考えられそう。ちなみに、中国東北地方の楯分離式に大いに関係するものがある。

さて、王建新氏が前二世紀前後(私は前二世紀前後とされる)中国長白山地方の吉林省集安縣五道溝漢溝積石塚(積石塚)から、龍淵洞積石塚古墳の鉄斧と同様、縦長(楯)銅斧がある(「短小な形銅斧も溝門遺跡にある」)。ここで甲B II式とされる銅斧(遼西式銅斧系統のB X式)もあり、多趾粗文鏡の末期型式(朝鮮半島)九州の細形銅斧に先行する粗形銅斧にも発見されている。

朝鮮半島では、多趾粗文鏡や縦長の鋳造鉄斧・銅斧は前二世紀も残り、多趾粗文鏡や短小の鋳造鉄斧もある。まさしく、多趾粗文鏡の交換・前二世紀初期前後、また粗形銅斧の流行してきた時期が前二世紀であり、自柏里式・梨花洞式銅斧の交換・前二世紀初期前後、

初頭に共存出現し、また、青銅器製作時の銅戈が自柏里式・梨花洞式な銅戈よりもかなり新しい型式であることを考慮すれば、弥生中期の初頭は上段が前二世紀新期と考えるを得ない。そして、半島との時間差を考えると、やはり、前二世紀前後(三三〇年)が、弥生中期のはじまりと理解される。

なお、自柏里式銅斧については、プロローションが梨花洞式と同じであり、河北省燕下都辛庄頭三〇号墓式銅斧の類似もあり、その発生については、中国中原地方北部から遼西地方のどこかに求められるかもしれない。

中国では、殷代以来の胡未発達型銅斧が残っており、それが胡発達の遼西式銅斧に影響し、両者の特徴の中をとって、版遼西式直後型式が出現。辛庄頭三〇号墓式銅斧の祖形となる。主眼とする。

最も問題となる、中国戦国期から前漢(西漢)代の胡未発達型古式支銅斧類似型式については、戦国期に古式支の胡がやや発達し、浅い楯に文様が施されたものや、それよりも胡が発達した、雲南省晋寧県の石寨山遺跡出土の長胡戈(前漢中期とされる)がある。

また、同遺跡では、プロローションが朝鮮式細形銅斧に近く、人文支の用語で引ける無溝式銅斧(前漢中期)もある。

里式・梨花洞式銅斧も盛行している。

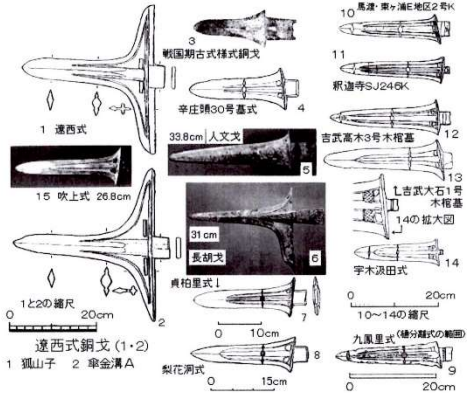
なお、多趾粗文鏡については、韓国忠清南道の東西里石塚塚で前二世紀新期前に早い出土例があるものの、多趾粗文鏡を伴い、その共存状態は前二世紀古期前後に引き継がれているものと思われる。

韓国扶餘郡九鳳里石塚塚・咸平郡草浦里石塚塚・扶餘郡合松里積石塚(木棺が内包)は、前二世紀古期前半は前後であり、自柏里式・梨花洞式銅斧等もあり、九鳳里では多趾粗文鏡・細文鏡を伴出している。

ちなみに、北九州の古式高木式銅斧(第4図)は楯元に微溝起線文あり、内も自柏里式・梨花洞式よりも小さく、自柏里式・梨花洞式銅斧以後に属する。古式高木式銅斧を出した弥生前期末より中期初頭の古式高木式・厚木椗塚は、前二世紀新期前後に九州に流れた文物か、その影響のものを副葬しているものであり、九鳳里塚よりも後の遺跡である。前二世紀前後の遺跡と思われる。

また、佐賀県大川市車道遺跡では弥生中期初頭とされる楯結合式複合原南支銅斧が出土しているが、その形状は扁平で内(※)が極めて小さく、楯分離式・結合式の違いはあるが、宇木液田式銅斧と共通性もある。

この銅斧も自柏里式・梨花洞式銅斧以後に属する新しい型式であり、弥生中期初頭がやはり、前二世紀前後から



第4図 銅戈各種概念図

出典、1・2は小林晋樹「東北アジアにおける銅戈の起源と年代」2008、3ウェブ「袁田所長の北京弾丸旅行記」中国革命軍事博物館【中国史時代兵器部】、4は河北省文物研究所『燕下都』1996、5・6ウェブ「ab4130用語辞典」、7『朝鮮古文化論叢第一巻』養徳社1947、8『古代史発展5』講談社1974、9『東洋史』青銅器伝来 3000、10-14は吉田弘典『弥生時代の武器形制論』考古学資料集21・2001、14は同編後編『未定題』本文編、15『日本考古学年報』83。

ば、新たに加わった型式に対応できるし、削除も可能である。

朝鮮半島や日本では、大別して銅斧の楯部分が先端で分かれる楯分離式と、先端がつながる楯結合式が存在する。

それゆえ、朝鮮式最古期の銅斧の自柏里式は楯分離式の範疇であり(第四図、第五図)、平塚自柏里探土場出土の従来自柏里型といわれていたものを統一してその名称を与えるようにした。

同じく梨花洞式は楯結合式の範疇であり、北朝鮮咸州市梨花洞土城塚の銅斧を指す。自柏里式・梨花洞式銅斧の内、「※」はいずれもがっしりとした大きな内であり、日本ではあまり見られないものである(第四図)。

参考に、柳沢遺跡銅斧の内を見ると、自柏里式・梨花洞式銅斧

梨花洞土城塚は前二世紀中葉より新期への遺跡と推定でき、当然梨花洞式銅斧の盛行年代は前二世紀前後のうちとすることができ。

その他、梨花洞式銅斧出土の半島遺跡は前二世紀古期前半とみられる九鳳里・草浦里・素素里などであり、新しくは前二世紀と考えられている大部の新川遺跡で、細形楯結合式複合原南支銅斧や中細形古式前期後の銅斧も伴出している。

つまり、梨花洞式銅斧は前二世紀最新期に作られる可能性があるが、前二世紀に流行し、楯文様銅斧盛行時期の前期に末期的なものが僅かにあるというになる。

なお、日本では完全な梨花洞式銅斧は少なく、梨花洞式末期型式の、いわば梨花洞式くずれとも言うべき、内(※)のやや退化したものが、援(支)身の延びたものが、若干認められる程度である。このことも、弥生中期初頭が前二世紀前後とす説の支持となる。

大分県後志津の弥生中期後半半岩式鹿柄埋蔵の楯結合式無紋型銅斧は、梨花洞式くずれであり、援が延び、中細形銅斧に近い細形銅斧で、吹上式銅斧とも称してもよいものである(第四図15)。この例は伝説のやや長い例で弥生中期前半より中葉の年代が考えられよう。

日本における細形銅斧 Mia・b 式が弥生前期末より中期

初頭に共存出現し、また、青銅器製作時の銅戈が自柏里式・梨花洞式な銅戈よりもかなり新しい型式であることを考慮すれば、弥生中期の初頭は上段が前二世紀新期と考えるを得ない。そして、半島との時間差を考えると、やはり、前二世紀前後(三三〇年)が、弥生中期のはじまりと理解される。

なお、自柏里式銅斧については、プロローションが梨花洞式と同じであり、河北省燕下都辛庄頭三〇号墓式銅斧の類似もあり、その発生については、中国中原地方北部から遼西地方のどこかに求められるかもしれない。

中国では、殷代以来の胡未発達型銅斧が残っており、それが胡発達の遼西式銅斧に影響し、両者の特徴の中をとって、版遼西式直後型式が出現。辛庄頭三〇号墓式銅斧の祖形となる。主眼とする。

最も問題となる、中国戦国期から前漢(西漢)代の胡未発達型古式支銅斧類似型式については、戦国期に古式支の胡がやや発達し、浅い楯に文様が施されたものや、それよりも胡が発達した、雲南省晋寧県の石寨山遺跡出土の長胡戈(前漢中期とされる)がある。

また、同遺跡では、プロローションが朝鮮式細形銅斧に近く、人文支の用語で引ける無溝式銅斧(前漢中期)もある。

とする説を確定させる資料である(第四四頁)。  
 飯に、白柏里式・梨花洞式銅支が前三〇〇年前後から製  
 作開始があったとしても、釈迦寺銅支との時間的隔たりは  
 大きく、釈迦寺式銅支の製作開始年代は一〇〇〇年前後以後  
 遅れるものと理解される。また、日本では今のところ  
 完璧な白柏里式銅支は皆無であり、そのことも、日本の青  
 銅器文化が、朝鮮半島青銅器文化にかなり遅れていること  
 を示す。  
 さらに、朝鮮半島では、前二世紀新前期後に、鏡では多  
 鈕粗文鏡を滑め、多鈕細文鏡のみが流行するようにな  
 り、日本へも流れたと推定される。  
 日本では弥生中期初頭前後から中葉の發所で細文鏡が割  
 集される例が多く、私はこの実年代が前二世紀を中心とす  
 る前後の時期とみたい。  
 なぜならば、多鈕粗文鏡は日本列島では未だに見つ  
 けないし、細文鏡も新式のB式のみであることが注目  
 され、さらに多鈕粗文鏡の伝播が半島から日本への一方通  
 行であることが、時間差を生み出していると考えられるの  
 である。

四 鑄造鉄斧よりみた弥生中期の実年代  
 近年、弥生時代の実年代を考古学で検証しようとするに  
 いて、日本では鑄造鉄斧・鍛造鉄斧が共存し、鍛造板状  
 鉄斧・鍛造袋状鉄斧等が、北九州その他で発見されている。  
 鑄造鉄斧より見た弥生年代論も、結局は大陸と日本にお  
 ける同様の鉄斧の時間差をどのように考えるかの個人的差  
 異によって、時間的位相が異なってくることで、甲乙つけ  
 がたい年代論が浮上する。  
 ここで、まず、中国の鉄斧を見ながら、日本で船載鑄  
 造鉄斧の好例といわれる福州比忠遺跡の例(第6図の1)  
 について考察したいと思う。これは前二〇〇年を大きく前  
 後すると思われる北朝鮮平安北道の細竹里遺跡の同図1をよ  
 く似ているが、河北省燕下都の遺跡他からもよく似たもの  
 がみつつかっている。  
 しかし、似ているのは口部外側の二条突帯であり、口内  
 部の形については違いがあり、細長い六角形に近いもの  
 と四角形とに分かれる。これは湖南省永寧台鑄造鉄斧(第  
 四の3・4)、前漢後期~後漢前期、即ち、ほぼ前二世  
 紀~後一世紀内とされるもの(口部が六角形をなし外部  
 突帯がある)に近ついたものといえる。また、同図4につ  
 いては、河北省滿城・号漢墓に、類似品があるとされてい  
 る。

つまり、中国では前二〇〇年前後(三三〇年)には、口  
 内部六角形外部突帯の鑄造鉄斧が盛行しており、これによ

あたって、問題となってきたているのが鉄器の日本流入であ  
 る。一人の人間が斧を持ち歩いて、それが貴重品であるの  
 だから、三〇〇年くらいは簡単に過ぎてしまう。たとえ、破  
 損しても、貴重品を再加工する。再加工品は小型で破損し  
 にくく、また、何年も使うことにならうであろう。人から人  
 へ製品がわたればさらに時間差を生ずることになる。  
 製品の制作年代と廃棄年代は五〇年を大きく越えること  
 は頻繁であり、一〇〇年を越えることもいくらかある。多  
 少とも、農業に携わり、身近に大工さんなど、職人に接し  
 た人であれば、このことは十分理解できると思う。  
 ちなみに、村上恭通氏によれば、弥生時代中期後半にお

り、やや古い様相の同図の比忠鉄斧は前二世紀初期を大  
 きく前倒した製造と見てよいであろう。  
 これが船載品であるならば、弥生中期後半に埋蔵される  
 には、一世紀を大きく越える伝世があったと推定される  
 としてかといえ、弥生中期後半には新式鍛造鉄斧の袋  
 状鉄斧も盛行しており、比忠鉄斧(全坑SK11)・鉄斧  
 三〇〇五は、新旧鉄斧の交換期の最古品とみられるから  
 である。  
 また既に、弥生中期前半には宇木田式・鎌田原式銅支  
 などがあり、それが朝鮮半島の前二世紀前後の梨花洞式銅  
 支よりも後出の相のものであることも、比忠鉄斧の伝世  
 を示すものである。  
 さらに、埼玉県朝霞市向山遺跡の弥生中期後半の住居址  
 から出土した鉄斧は、短小形二条突帯鑄造鉄斧であり、  
 口内部が長方形である点が違いう以外、第6図に掲げた吉野  
 里遺跡の鑄造鉄斧と近似している。  
 向山遺跡の比忠鉄斧よりも後出の相であること、これも比  
 忠鉄斧の伝世を証明するものであるし、吉野里の丈短小  
 形二条突帯鑄造鉄斧(第6図の6)が弥生中期でそれ以降  
 に船載されたものがあることが分かる。向山遺跡は野島水  
 氏論文、ウヰ野熊本照斎藤山遺跡1、弥生時代の初期鉄  
 斧に掲載されている。

斧の口に木柄を嵌める鉄斧形態は中国では空首斧といわ  
 れており、空首斧自体も時代が下がると、縦長から次第に  
 太が短い形態が多くなるようだが、もちろん、前二世紀には  
 多くの縦長の鑄造斧が盛行している。  
 こうしてみると、弥生中期前後の突帯付鑄造鉄斧の再  
 加工品もその原形が前四~前三世紀のものだけではなく、  
 中国前漢以後漢前期流行のものまで含まれているものと理  
 解できる(第7図参照)。  
 鑄造鉄斧の日本例の第6図5・6の類は、永寧台鉄斧の  
 3・4と同時期か、さらには下の鑄造鉄斧の未期的な型式の  
 一つであり、さらに若干趣が違うが、長崎県原の辻(はる  
 のつじ)遺跡他でも発見されている。  
 これらの類の鑄造鉄斧は、弥生中期のどの時期から盛行  
 したのか、一部は弥生後期にも盛行したのかも、鳥取県  
 青谷上寺地遺跡の八高鏡の伴出関係などを含めて、弥生  
 中期の年代を判断する有力な材料になるであろう。  
 日本において、これらの丈短小形鑄造鉄斧が多いことは、  
 永寧台遺跡・滿城・号漢墓の鉄斧の類似品が多用して、大略、  
 前二〇〇年前後以降に船載されたものが多いことは問  
 違いない。  
 そして、弥生中期初頭前後の愛媛県大久保遺跡の二条突  
 帯鑄造鉄斧の破片が、丈短小形の可能性が高く、しかも口

内部六角形類に属すること、他にも丈短小形の可能性が高  
 い二条突帯鑄造鉄斧の破片があることなどから、大略、弥  
 生中期の開始年代が、前二〇〇年前後(三三〇年)以降に  
 あたるものといえる。



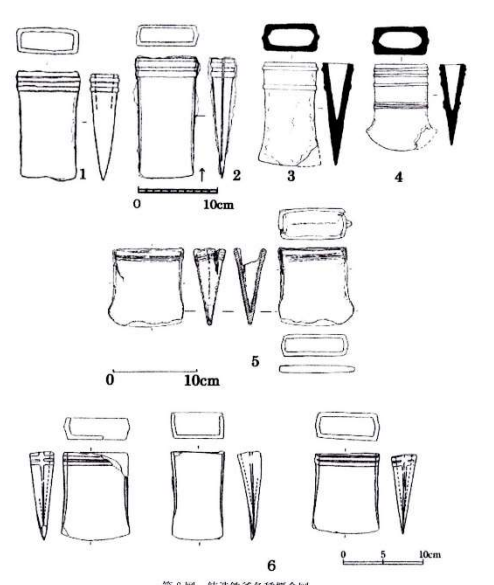
第7図 中国の鑄造鉄斧2例(縮尺不同)  
 1は福建武夷山区農村漢代遺跡の空首斧。漢代の遺跡。2は吉林寶泉廟前漢代  
 桑地遺跡の空首斧。前漢末~後漢初めとされる。いずれも丈短小形二条突帯鑄造鉄  
 斧で、白志翔氏は中国中原地域から輸入したものとみている。埼玉県向山遺跡や佐  
 賀県吉野里遺跡の弥生中期のものに限る。

たつて、問題となってきたいるのが鉄器の日本流入であ  
 る。一人の人間が斧を持ち歩いて、それが貴重品であるの  
 だから、三〇〇年くらいは簡単に過ぎてしまう。たとえ、破  
 損しても、貴重品を再加工する。再加工品は小型で破損し  
 にくく、また、何年も使うことにならうであろう。人から人  
 へ製品がわたればさらに時間差を生ずることになる。  
 製品の制作年代と廃棄年代は五〇年を大きく越えること  
 は頻繁であり、一〇〇年を越えることもいくらかある。多  
 少とも、農業に携わり、身近に大工さんなど、職人に接し  
 た人であれば、このことは十分理解できると思う。  
 ちなみに、村上恭通氏によれば、弥生時代中期後半にお

り、やや古い様相の同図の比忠鉄斧は前二世紀初期を大  
 きく前倒した製造と見てよいであろう。  
 これが船載品であるならば、弥生中期後半に埋蔵される  
 には、一世紀を大きく越える伝世があったと推定される  
 としてかといえ、弥生中期後半には新式鍛造鉄斧の袋  
 状鉄斧も盛行しており、比忠鉄斧(全坑SK11)・鉄斧  
 三〇〇五は、新旧鉄斧の交換期の最古品とみられるから  
 である。  
 また既に、弥生中期前半には宇木田式・鎌田原式銅支  
 などがあり、それが朝鮮半島の前二世紀前後の梨花洞式銅  
 支よりも後出の相のものであることも、比忠鉄斧の伝世  
 を示すものである。  
 さらに、埼玉県朝霞市向山遺跡の弥生中期後半の住居址  
 から出土した鉄斧は、短小形二条突帯鑄造鉄斧であり、  
 口内部が長方形である点が違いう以外、第6図に掲げた吉野  
 里遺跡の鑄造鉄斧と近似している。  
 向山遺跡の比忠鉄斧よりも後出の相であること、これも比  
 忠鉄斧の伝世を証明するものであるし、吉野里の丈短小  
 形二条突帯鑄造鉄斧(第6図の6)が弥生中期でそれ以降  
 に船載されたものがあることが分かる。向山遺跡は野島水  
 氏論文、ウヰ野熊本照斎藤山遺跡1、弥生時代の初期鉄  
 斧に掲載されている。

つまり、中国では前二〇〇年前後(三三〇年)には、口  
 内部六角形外部突帯の鑄造鉄斧が盛行しており、これによ

あたって、問題となってきたいるのが鉄器の日本流入であ  
 る。一人の人間が斧を持ち歩いて、それが貴重品であるの  
 だから、三〇〇年くらいは簡単に過ぎてしまう。たとえ、破  
 損しても、貴重品を再加工する。再加工品は小型で破損し  
 にくく、また、何年も使うことにならうであろう。人から人  
 へ製品がわたればさらに時間差を生ずることになる。  
 製品の制作年代と廃棄年代は五〇年を大きく越えること  
 は頻繁であり、一〇〇年を越えることもいくらかある。多  
 少とも、農業に携わり、身近に大工さんなど、職人に接し  
 た人であれば、このことは十分理解できると思う。  
 ちなみに、村上恭通氏によれば、弥生時代中期後半にお



第6図 鑄造鉄斧各種概念図  
 1は北朝鮮平安北道寧安郡細竹里遺跡(前二世紀)2は福州比忠遺跡(弥生中期後半)、3・  
 4は中国湖南省永寧台鑄造鉄斧(前漢後期~後漢前期)、5は鳥取県青谷上寺地遺跡、6は佐賀県  
 吉野里遺跡。  
 1・3・4は縮尺不同・不明。出典は1・3・4白志翔2009、2村上恭通1990、5岡村功2002、6七  
 田忠昭2005、但し原著関連報告書の引用がある場合はご容赦願いたい。







- 4 『信濃』第六〇巻第一号、二〇〇八年二月でも関連記述がある。
- 5 橋口建世「『辰素』十四年代測定法による弥生時代の年代論に関連して」『日本考古学』一六号、二〇〇三年。橋口は瀬戸内、畿内の弥生後期の開始期を貨幣等の年代から一世紀末と見ており、それ以後、九洲の後期の開始期が遡るかどうかは今後の動向を見守りたい。また、弥生中期の開始期について、橋口は前一世紀古期に見ているようであり、それについては私と意見が違うようである。私の二〇〇三年の誤差を勘案すれば、前一世紀新期が弥生中期初期年代の最古の音響電阻となる。なお、橋口氏と私の見解の相違は橋口氏が中国文物と日本の年代差を約一〇〇年前後とするのに対し、私が約七〇年（二〇〇年）の年代差とみる史観の違いによる。
- 6 宮本一夫「細形銅剣と細形銅矛の成立年代」『東アジア青銅器の系譜』建出閣、二〇〇八年。
- 7 王建新「東北アジアの青銅器文化」同成社、一九九九年。
- 8 北朝鮮咸興市花川洞銅剣を典型とする。
- 9 袋部外銅器部より、やや上に、双剣と矢部（遺帯）が二条のものは、岩手県江川町山田大銅矛と称する器器化した巨大矛がすでに春秋晩期前後に見られる。また、北朝鮮では鉄矛に似た韓国様式の矢部銅矛が散見する。多条といっても、矢部銅矛のほうが先行する可能性が高く、矢部銅矛は中国中部地方や雲南省を含むであろう。福岡県飯付遺跡田地区の前期末後期の複製農耕から出土の銅矛一

- 伝承により「東宮姫」と見えては弥生中期は紀元九〇〇年一三〇〇年の時期で終了すると考えざるを得ない。
- 一般に、出土状態が断定できないとして、桜馬場式農耕に貨幣が伴うことを排除するのはよくない、むしろ貨幣が伴う可能性があることを表現すべきだ。
- また、桜馬場遺跡のRⅣa式より後漢早期前後の方格短剣が2面出ていること、桜馬場式農耕期の上限が紀元九〇〇年一三〇〇年とすることに、矛盾しない。
- 九州の弥生後期の始まりが近畿と同じか早いのかの詳細は、今後の貨泉出土の農耕、出土土器型式の動向をみたい。
- 以上、まとめとして、弥生中期年代は紀元前一〇〇〇年一三〇〇年、紀元九〇〇年一三〇〇年とする（第四図）。
- この年代推定では、弥生中期後半とされる大阪府池上遺跡の大規模建物の柱材の年輪測定が前二一二年伐採とされることに矛盾するという意見がある。
- しかし、何度も言うように、科学測定資料の存在環境や、資料と伴出文物の時間差など科学以前の思考が、考古学の史観と同じく、個人差があり、単純に科学測定を受け入れることはできないのである。
- また単純に弥生中期後半といっても上層様式の前後関係を示しているだけで、実際の近畿弥生中期後半の年代幅が、中期前半の年代幅と同じであると断定できない。

- 18 ウェブのabc010考古用語辞典の長岡支が参照。
- 19 岡内三武氏「日本考古学協会第七回総合研究発表要旨」二〇〇五年の引用『考古学』一九八の四、一九八の五の一文脈の図を参照。
- 20 註7・23に同じ。
- 21 註7に同じ。
- 22 村上慈通「倭人の考古学」青木書店刊、一九九九年。
- 23 白羽翔著「佐々木治政」中国古史の鉄器研究、同成社、二〇〇九年。
- 24 ウェブ「松澤芳宏の古代中世史と郷土史」二〇〇九年、中国科学考古研究所編「洛陽橋漢墓」中国田野考古報告集、考古学専刊種第六号、一九九九年。
- 25 中国科学考古研究所編「洛陽橋漢墓」中国田野考古報告集、考古学専刊種第六号、一九九九年。
- 26 橋口建世「農耕と弥生時代年代論」建出閣、二〇〇五年。註1に同じ。
- 27 註7・23に同じ。
- 28 註7・23に同じ。
- 29 松澤芳宏「古墳の定義と墳丘墓名跡の廃止について」『信濃』第五九巻第一号、二〇〇七年で金沢市大友西遺跡・石川原口からあられた遺跡の井村年輪測定値を利用。
- 30 橋口建世「弥生時代青銅器の源流」『古代史を拓く』講談社、一九七四年。
- 31 註7に同じ。

- 19 岡内三武氏「日本考古学協会第七回総合研究発表要旨」二〇〇五年の引用『考古学』一九八の四、一九八の五の一文脈の図を参照。
- 20 註7・23に同じ。
- 21 註7に同じ。
- 22 村上慈通「倭人の考古学」青木書店刊、一九九九年。
- 23 白羽翔著「佐々木治政」中国古史の鉄器研究、同成社、二〇〇九年。
- 24 ウェブ「松澤芳宏の古代中世史と郷土史」二〇〇九年、中国科学考古研究所編「洛陽橋漢墓」中国田野考古報告集、考古学専刊種第六号、一九九九年。
- 25 中国科学考古研究所編「洛陽橋漢墓」中国田野考古報告集、考古学専刊種第六号、一九九九年。
- 26 橋口建世「農耕と弥生時代年代論」建出閣、二〇〇五年。註1に同じ。
- 27 註7・23に同じ。
- 28 註7・23に同じ。
- 29 松澤芳宏「古墳の定義と墳丘墓名跡の廃止について」『信濃』第五九巻第一号、二〇〇七年で金沢市大友西遺跡・石川原口からあられた遺跡の井村年輪測定値を利用。
- 30 橋口建世「弥生時代青銅器の源流」『古代史を拓く』講談社、一九七四年。
- 31 註7に同じ。

- 19 岡内三武氏「日本考古学協会第七回総合研究発表要旨」二〇〇五年の引用『考古学』一九八の四、一九八の五の一文脈の図を参照。
- 20 註7・23に同じ。
- 21 註7に同じ。
- 22 村上慈通「倭人の考古学」青木書店刊、一九九九年。
- 23 白羽翔著「佐々木治政」中国古史の鉄器研究、同成社、二〇〇九年。
- 24 ウェブ「松澤芳宏の古代中世史と郷土史」二〇〇九年、中国科学考古研究所編「洛陽橋漢墓」中国田野考古報告集、考古学専刊種第六号、一九九九年。
- 25 中国科学考古研究所編「洛陽橋漢墓」中国田野考古報告集、考古学専刊種第六号、一九九九年。
- 26 橋口建世「農耕と弥生時代年代論」建出閣、二〇〇五年。註1に同じ。
- 27 註7・23に同じ。
- 28 註7・23に同じ。
- 29 松澤芳宏「古墳の定義と墳丘墓名跡の廃止について」『信濃』第五九巻第一号、二〇〇七年で金沢市大友西遺跡・石川原口からあられた遺跡の井村年輪測定値を利用。
- 30 橋口建世「弥生時代青銅器の源流」『古代史を拓く』講談社、一九七四年。
- 31 註7に同じ。